アラビアン・ナイト研究の問題と展望

The Arabian Nights Studies: Current Scene

西尾哲夫^{*}
NISHIO Tetsuo

I. 「イフタファーシムシム」

本稿の目的は、アラビアン・ナイト研究の案内書として最近出版された Robert Irwin, *The Arabian Nights: A Companion*. (London: Allen Lane/The Penguin Press, 1994. 344pp. ISBN 0-713-99105-4 Hardcover, £ 20.00) の批評を通して、これまでのアラビアン・ナイト研究の問題と今後の展望について考察することである。あわせて、最近完訳になった前嶋・池田訳『アラビアン・ナイト』の文明史的意味について⁽¹⁾も考察してみたい。

リチャード・バートンによれば、アラビアン・ナイトを全部読もうとした者は必ず途中で死んでしまうという俗信がアラブ世界にはあるらしいが、読むだけでも大変なアラビアン・ナイトのアラビア語原典からの全訳を志した故前嶋信次氏、そしてその訳業を完成させた池田修氏による『アラビアン・ナイト』（平凡社、東洋文庫所収）は、日本の翻訳文化の一つの偉業と言える。前嶋氏が『アラビアンナイトの世界』（講談社現代新書）で述べ、また池田氏が記念講演で述べたように、アラビアン・ナイトは未だに多くの謎に満ちた存在であり、文学としての読まれ方以上に、「語り」の型に铸れられた民衆の意識を読み解く作業が切望される。

Introduction で著者は執筆の動機と目的について述べる。アラビアン・ナイトは、ギボンの『ローマ帝国衰亡史』やブルーストの『失われた時を求めて』と同様、誰もが知っていながら実際に全部読んだ者は殆どいない長編だが、19世紀ヨーロッパの読書人の書架を飾ったバートンの翻訳も、今ではアラジン、アリババ、シンドバッド等の一部の物語、それも子供向けに不道德な部分を削除した形でしか、文学的余命を保っておらず、グリム童話に類するものにしか見られないのはなぜだろうか。アラビアン・ナイトは西洋で書かれたアラブ文学史であまり丁重な扱いを受けてこなかったし、それ以上にアラブ世界の特に知識人にとって「文学」の名に値するものともみなされてこなかったのは、なぜだろうか。本書の目的は、文学的理解の「手引書」として、アラブ世界の文学的伝

^{*} 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授
Associate Professor, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies

統に関する背景的情報を提供することであり、さらに各物語が当時どんな目的で作られ、どのように語られたり聴かれたりしたのか、ヨーロッパやアメリカではどのように受容されたのかについて探ることである。本書はアラビアン・ナイトを社会史の資料として理解するための「手引書」でもある。社会とその人々の「心性 (*mentalité*)」を探る一環として、本書はアラビアン・ナイト研究の歴史そのものをも考察の対象とする。ただし、アラビアン・ナイトと絵画・音楽といったテーマは扱われない。では、「イフタフヤーシムシム」のごまの呪文とともに本書の扉を開けてみよう。

II. 異端の翻訳者

第1章 Beautiful Infidels 「美しき異端者達」では、時代の嗜好にあうという意味で上品な翻訳の方を厳密な翻訳よりも優先させたルネッサンス期の古典翻訳家を本来指す章題からも判るように、アラビアン・ナイトの翻訳に関わる問題が扱われる。まず、アラビア語の難しさ、特にアラビアン・ナイトが書かれた中世アラビア語という口語表現を多く含んだ言葉の翻訳に伴う難しさについて触れた後に、アラビアン・ナイトの翻訳に固有の障害を三つ挙げている。第一に圧倒的な量であり、第二に本来口頭で語られるべきものであることによる文体的重々しさであり、そして最後に最も重要なことだが、アラビア語原典の決定版がないことである。アラビア語版には主なものとしてカルカタ第一版と第二版、ブーラク版、プレスラウ版、マフディー版があるが、完本でないマフディー版を除いて学問的に厳密な文献批判と校訂作業によって出版されたアラビア語版はなく、どの版も多かれ少なかれ「ちんぷんかんぷん」な文章を含んでいる。どこまで翻訳者の改訂が許容されるかという翻訳一般の問題とも関連するが、アラビアン・ナイトの翻訳においては、いかなる翻訳も改訂を行わざるを得ず、著者の言葉を借りれば、「良い翻訳とは必ずしも意味の良くわかる翻訳とは限らない」。

しかし、「良い翻訳」の意味する内容が時代の風潮に影響されてきたのも事実である。アラビアン・ナイトの翻訳史は、その圧倒的な量を恐れることなく、自らの嗜好と理想のままに訳し方を選び、さらには原典さえも改竄する訳者達の類まれな個性と時代の精神が織り成す文明史的事件なのである。アラビアン・ナイトを「発見」し、初めてヨーロッパに紹介したガラン、訳書も底本の写本も失われ重訳版しか残っていないハンマーブルグシュタル、底本となった写本の由来が疑わしいハビヒト、語学的に正確で百科全書の注釈が豊かだが少なからず恣意的に取捨選択を行ったレイン、アラビアン・ナイトを何よりも文学としてとらえ翻訳困難な詩や好色な部分も厭わず訳したペイン、その常軌を逸した生き方に似てその翻訳も褒貶はげしいバートン、当代の文学者達の熱烈な支持を受けたが、偏見と曲解に満ち、語学力も疑わしいマルドリユス、そのマルドリユス

の翻訳を絶賛し、英訳を引き受けながらも果たせなかったアラビアのロレンスこと T. E. ロレンス等、まさしく訳者自身が社会の「異端者」の如くである。

このような翻訳の歴史とヨーロッパ文学への影響を見る時、アントワヌ・ガランこそが「アラビアン・ナイトの真の著者である」という著者のやや逆説的な指摘はあながち誇張ではない。また「ガランは子供に、レインは図書館に、パートンはどぶに」と当時酷評されたパートン訳こそが、翻訳自体の総合点の高さと、訳書自体が後の文学や文化に与えた影響の大ききの点で判断するならば、最も傑出した存在であると言わざるを得ない。その意味で、英文学はアラビアン・ナイトとの交流によって新たな文化を創出したのであり、著者が指摘するように、現在最も正確なヨーロッパ語訳の一つであるエンノ・リットマンのドイツ語訳は、「嘘のつけないワシントン」の如く、ドイツの誠実さの見本ではあっても、ドイツ文学・文化に影響を与えることはなかったのである。

しかしながら、世界文学としてのアラビアン・ナイト・エンターテインメントは、ヨーロッパ・キリスト教世界がオリエントとしてのアラブ・イスラム世界を科学的に理解しようという19世紀の文化的土壌の中から産まれたのであり、情報過多の時代における学問的に完全なアラビアン・ナイトの翻訳というものは、古典の正確な紹介という以上の文明史的意味を持ってないのではないだろうか。リットマン訳に対する著者の評価はそのまま『東洋文庫』という古典シリーズに収まった前嶋・池田訳『アラビアン・ナイト』の評価でもある。日本人のアラブ世界理解に貢献するものであっても、19世紀のヨーロッパで見られたような影響を日本文化に与えることはもはやありえないのではないだろうか。

III. 原典の迷宮

第2章 The Book without Authors [作者なき書物] では、アラビア語原典の成立に関する問題が扱われる。アラビアン・ナイトの内容に関する従来の研究は、本来のアラビアン・ナイトがいかなる姿をしていたかについての十分な文献批判に基づくものではなく、その議論は時として不毛になりがちであった。しかしながら、語られる物語の登場人物さながらに金銭欲と名誉欲にとらわれた偽造者が活躍するアラビアン・ナイト原典の写本発見の歴史物語は、まるでアラビアン・ナイトが語る、迷路のような中世イスラム都市にある迷宮に迷い込むようなものである。

18世紀初頭のカラン訳によって初めてアラビアン・ナイトはヨーロッパの知るところとなったわけだが、最初のアラビア語版を印刷したのもヨーロッパの東洋への深い関心のなせるわざであった。最初の印刷本であるカルカッタ第一版は最初の二百夜のみで、写本情報もなく、本来語学教材用であった。次に印刷されたのは、いわゆるプレスラウ

版である。これはハビヒトが翻訳の底本にしたと主張するチュニジア写本を基に校訂されたものである。しかしながら、マクドナルドの研究によれば、元来ハビヒトの主張する写本など存在せず、彼の訳は様々なテキストの訳の寄せ集めであり、同様にプレスラウ版も複数の写本の寄せ集めにすぎない。アラブ世界の本格的印刷の始まりであるブーラク印刷所で印刷されたのが、いわゆるブーラク版である。この版は言語面でも内容面でも整合性が高く、実在する一写本から校訂されたものだが、残念ながら写本情報はなく、同写本も失われてしまったらしい。そして、ブーラク版も含めたそれまでの印刷本と18世紀のエジプト伝来写本から、現在最も信頼のおける完本とされるいわゆるカルカット第二版を出版したのが、マックナーテンであり、1839-42年のことであった。前嶋・池田訳を含めてバートンやリットマンといった訳がこの版を底本としている。しかしながら、後に触れるように、カルカット第二版も学問的に十分な校訂作業の産物ではなく、アラビアン・ナイトの写本自体の性格とも関連して決定版とは言い難い。

信頼にたる原典作成を目的として現存する写本の綿密な研究をしたのが、バートン訳に協力したパリ国立図書館の司書、ゾータンベール〔ツォーテンベルグ〕である。現在少なくとも22の写本が確認されているが、その殆どが彼によって研究され、その中の多くがエジプト伝来であり、他にシリア伝来が数写本、イラク伝来が一つあることが判明した。エジプト版の大部分は、近代になってヨーロッパ人の収集家の好みにあうように書き直されたものであり、当時の印刷流布本の影響があることも判った。彼の最大の功績は、ガランが使用したがその後失われていた写本を発見したこと、イラクの古い伝承による最も原書の形に近いバグダード版を同定したこと、さらにそのバグダード版の中に、従来の印刷本や再発見されたガランの写本にも含まれておらず、ガランの創作ではないかと疑われていたアラジンの物語を発見したことである。しかしながら、ガランの利用した写本は他にもいくつかあったようであり、エジプト版より本来のアラビアン・ナイトに近いと考えられたガラン版の底本であるシリア版の復元のための校訂作業に着手したのが、ダンカン・ブラック・マクドナルドである。その目的は彼自身の手では成就されなかったけれども、アラジンと同様にガランの創作と疑われていたアリ・ババの物語の写本をオックスフォードの図書館で発見したことと、先述したようにプレスラウ版の由来を見破ったことは、彼の最大の功績である。

そして、アラビアン・ナイト研究史上画期的な仕事をしたのが、マクドナルドのガラン版シリア原典作成のプロジェクトを引き継ぎ、初めて学問的に信頼のおけるシリア版原典を出版したムフシン・マフディーである。マフディー版に関する詳しい議論は本書に譲るが、本来の原文が様々なスタイルのアラビア語から成り立っていたこと、従来の版とは異なり本来のアラビアン・ナイトには物語の全体的テーマに何らかの一貫性があ

ったことが、彼によって判明した。また、その25年にもわたる詳細な文献学的研究の副産物として、イラクの古い伝承によるものとして重視されていたバグダード写本が、レバノン人ミカエル・サッパグの名誉欲と金銭欲からでた偽物であったこと、従ってゾータンベールがバグダード写本の中に再発見したガランのアラジンはサッパグがフランス語からアラビア語に再翻訳したもので、同様のことがシャヴィと称するシリア人司祭によるもう一つのシリア伝来版にも言えること、そしてさらに驚くべきことに、マクドナルドが再発見したアリ・ババの写本も、フランスの碩学ドゥ・サシーの弟子の一人で後にエジプトに商人として定住したジャン・ワルシーなる人物がフランス語からやはりアラビア語に再翻訳したものであることが判明した。彼の説に従えば、我々がアラビアン・ナイトと聞いて最初に思い浮かべるアラジンとアリ・ババの物語のアラビア語原典がいまだ発見されていないことになる。この原典探索の迷宮を抜け出すためには、いま一度アラビアン・ナイトの写本の性格について考えてみる必要がある。

マフディーはギリシャ・ラテンの古典文献の写本を校訂する方法をそのまま使って原テキストを再構成したのであるが、校訂作業に関わる理論的或は技術的問題はさておき、アラビアン・ナイトが文学的に高く評価されなかった存在であり、口承性の高い物語群であったことを考慮するならば、以下のような問題点が指摘できる。第一に文学的価値の高い古典文学の場合とは異なり、アラビアン・ナイトの場合、筆記者が十分注意して写字したとは考えられないこと、第二に本来読み物ではなくプロの語り手が暗記用にメモした写本であること、第三に語り手がメモする場合も、筆記者が写本を写字する場合も、自分の好みと聞き手や読み手の要望に応じて物語を粉飾したと考えられることである。

さらに、アラビアン・ナイトのように口頭による伝承が重要な意味を持つ文学テキストの場合は、口頭と文字の伝承の相違と相互の影響を考慮しなければならない。例えば、シリア写本群よりエジプト写本群が新しいと必ずしも言えないのは、エジプト写本の中に直接シリア写本より古い写本から筆写されたものがある可能性だけでなく、別系統の古い口頭による伝承を残す物語が筆記された可能性もあるからである。無名の人びとの手で徐々に形成されてきた複雑な歴史を持つアラビアン・ナイトの原典がどれかという問題は、どの段階の物語群をもって最初の統一物語集とするかという問題であり、シリア版ともエジプト版とも言えるし、各時代のアラビアン・ナイトがあったとも言える。この問題に答えるためには、中東諸国に残存する写本群と個々の物語の内容に関するさらなる比較研究が必要である。

IV. 物語の変身

第3章 Oceans of Stories [物語の大海] では、アラビアン・ナイトの物語の来歴を探る比較研究のために、類似した物語を含むインド、ギリシャ・ラテン、古代中近東、イラン等の書物、さらにアラブ古典文学や大衆文学、ガラン版以前にヨーロッパで流布していた物語集等が、その類似性と影響関係の観点から検討される。

アラビアン・ナイトを含めた民間説話の起源がインドにあるとする19世紀の説は、フィンランド学派達を中心に発展してきた科学的研究によって、過去のものとなったが、各物語の起源や影響関係を確定することは単純ではなく、さらに多くの基礎的作業が必要である。物語の筋や構成要素が類似している場合、それらが独立して成立したのか、何らかの借用関係があるのかを判断することは難しく、口伝と書伝という伝承経路を考慮するならば問題はさらに複雑になる。例えば、ガラン以前に書かれた『カンタベリー物語』等のヨーロッパの物語集とアラビアン・ナイトには多くの類似点があるが、ヨーロッパ世界とアラブ世界ですでに流布していた物語が相互に独立して収められた可能性もある。これまでのアラビアン・ナイトの研究は、それに高い文学的価値を認めなかったアラブ世界ではなく、ペローの童話集の成功に刺激されたガランの翻訳とともにヨーロッパを中心としてその歴史的関心のままになされてきた。

「フランス語への早い時期における翻訳と18世紀のヨーロッパ人の嗜好に合致したことが、この独特の物語集が世に埋もれ、やがて忘れ去られていくことから救った」という著者の言葉は、必ずしもヨーロッパ文明に属する者の傲慢さによるものではない。確かに、インドに源を発した物語が中東を経てヨーロッパに入ったとする説の背景には、印欧語系の古代インドとヨーロッパを結び付け、古代文明がイスラム文明を経て西洋文明に継承されたとする文明史観がある。また19世紀のアラビアン・ナイト写本探索と原典確立への情熱の背景には、理解不能のアラブ・イスラム世界という「オリент」に関する百科全書的知識を総合し、それを「科学」的枠組みの中で了解可能にしようという知的欲望と、その欲望を実現させるための基礎的作業として従来のものより正確な資料を「科学」的に確定しなければならないという学問的反省があった。さらに、アラビアン・ナイトという「オリент」の民衆文学への19世紀ヨーロッパにおける熱病にも似た異常な関心の高まりの背景には、ドイツのグリム兄弟による童話集やドイツ語辞典の編纂に代表される思想的趨勢があった。宗教改革の結果、「聖」としてのカトリック的中心至上主義が打破され、「俗」としてのプロテスタント的地域・土着主義が強力に台頭し、これが原動力となってナショナリズムが勃興していく中で、「民族」という概念に具体的存在感を与えるために地域土着の民俗文化（フォークロア）としての民話が収集・研究され、「民族」語を科学するための言語学（フィロロジー）が発展したので

ある。

ナショナリズムはヨーロッパにおいて地域民衆の文学や言語の研究、つまり民話研究や方言学の隆盛をもたらしたが、一方アラブ世界においては全く反対の様相を呈した。「アラブ民族」主義というヨーロッパ列強勢力に対抗するために産み出された一種のナショナリズム思想においては、アラブの統一原理としての正則アラビア語とそれによる古典文学こそが重要なのであり、逆にヨーロッパによるアラブ世界の分割支配を正当化するような地域文化の称揚につながる民話や方言の研究は、まさしく百害あって一利もない存在であった。このようなアラブ知識人の態度は、古典アラビア語とその文学にのみ文学的価値を認めるという従来からのアラブ文学者達の考え方とあいまって、アラブ人研究者による民話研究やアラビア語方言研究を遅らせる要因となった。また、歴史の皮肉な逆説と言えるかも知れないが、民話という民衆の意識に根ざした散文学を文学的に昇華できなかったアラブ世界では、現代的意味の小説というジャンルがやっと19世紀後半になってヨーロッパからの輸入文化として登場したのに対して、ヨーロッパにおいては、まさしくアラビアン・ナイト等の東洋の物語への関心を土台として近代小説が産声をあげたのである。このような生産的関係が、アラビアン・ナイトを産み出したアラブ世界と、中国、日本、東南アジア諸国をはじめとする東洋の文化との間にあったかどうかについてはもちろん、本書で扱わない東洋の民話とアラビアン・ナイトの関係について今後の研究が待たれる。

V. 言葉の魔術師

第4章 The Storyteller's Craft [語り手の技巧] では、職業的専門家としての語り手に関する研究成果が紹介される。現代のストーリーテラーたる小説家の起源を中世のプロの語り手に求めることには議論の余地があるとしても、特に中世のアラブ世界における彼らの実態はまだよくわかっておらず、今後の研究が必要な分野である。これまでの知見によれば、中東におけるプロの語り手の起源は、宗教界と俗世間の二つに求められる。前者には、モスクでフトッパを行ったハティーブと、宗教的物語を能くしたクッサース（カーッス）が挙げられる。預言者ムハンマドとその教え、初期の征服史等を様々に粉飾しながらもわかりやすく語ったクッサースも、初期にはイスラム教を拓める上で重要な貢献をしたが、宗教学者達によって宗教的物語の正統性が権威付けられたり、逆に否定されたりしていくに連れて、彼らの語る物語は正統を外れたいかがわしいものと見なされるようになり、やがて彼ら自身も社会的身分の低い、金儲けに語りをする輩と見なされるようになった。今一つの語り手の起源は民衆演劇にある。ギリシャの古典時代から盛んだった笑劇の伝統は、イスラム時代に入ってすたれたと従来は考えられて

いたが、最近の研究によると、民衆文化に関する史料があまり残っていないだけで、実際には社会の様々な階層や職業の人をまねた、マイムと呼ばれる笑劇は、中世のアラブ世界においても活況を呈していたようである。事実、現代アラビア語で物語一般を意味するヒカーヤという言葉も元々はマイム劇の物語を指していたようで、14世紀の初め頃からマイム劇に代わってプロの語り手が人気を博し始めるとともに、現代語に近い内容を意味するようになったらしい。

アラブの征服によりギリシャの学問は翻訳所等の公式な機関を通じてイスラム文化に吸収されていったが、マイム劇のような民衆レベルの文化的伝統がどのように扱われたのか、それに関わる職能集団がどのような運命をたどったのかという問題は、極めて興味深いテーマである。少なくともアラビアン・ナイトのギリシャ古典に類する物語群は、彼らの手によって伝えられた可能性もある。プロの語り手の身分はかなり低かったようで、手品師等の大道芸人と同類と考えられており、実際語り手達の仕事場は大道芸人達がたむろする通りであった。ただし、16世紀頃からコーヒーが流行するようになると、多くの語り手達はコーヒーハウスをその根城とするようになっていった。また、結婚式などのために金持ちの私邸に呼ばれたり、技巧にすぐれた者の中にはまれに宮廷に召しかかえられた者もいたが、彼らの大部分は、伝記資料はもちろん、名前さえも後世に残さなかった市井の人びとであった。彼らがどのような生活をし、どれくらいの稼ぎがあり、またどのように語りの技巧を研ぎ、どのように伝えていったのかといった事柄はまだよくわかっていない。ただし、断片的な見聞録によれば、物語が全くの口伝で暗記によって語られたのではなく、実際には、メモ程度であったか正確なテキストであったかはよくわからないが、書かれたものを基に語られたようである。これには、口伝えの物語よりも後世に伝えるべく文字化された物語の方が、内容的に優れているとする文化的背景があったようだ。

ここで問題となるのは、アラビアン・ナイトを含めたプロの語り手による物語群の口承性である。おそらく基本的には口伝によって語りの内容と技法が継承されながらも、その量もあって、語りの補助として書かれたテキストも存在したということは、純粋の口頭伝承でもなく文字文学でもないという、著者の言葉を借りれば、「文化的両義性」を持った存在であったことを意味し、このことはとりもなおさず、アラビアン・ナイトをはじめとする語り物が、口承文学としての特徴だけでなく、論理的明晰性という文学的審美の眼を通して洗練されてきた文学であることを意味する。従って、口承文学としての民話研究において蓄積されてきた知見と方法論の多くは、必ずしもアラビアン・ナイト研究にふさわしいとは言えない。しかし、アラビアン・ナイト研究は、純粋な口承芸術である詩の研究と同列に扱うこともできないし、かといって、朗唱によって聴衆の

高い評価を得てきたコーランのような作品が古典文学の中にもある点を考慮に入れたとしても、常に書くことを前提とした古典文学の研究と同列に扱うこともできない。

また、民話としての口承性は、アラビアン・ナイトをはじめとする民衆文学に高い評価が与えられなかった理由とも関連する。フラーフア〔＝おとぎ話〕と呼ばれる民話は本来女性によって家庭で語られる、おんな子供向けのものであり、また、物語を語ったり聴いたりすること自体が時間の無駄で誉められるべき行為ではないと考えられていたため、サマル〔＝夜とぎ〕とも呼ばれるように、一日の仕事の終わった夜、或是一年の休閑期に語られることが多かった。このように語り物文学、ひいては快樂につながる娯楽全体に対する社会的価値観が、先述したような、クッサースといういかがわしい説教師やマイム劇という外来文化を継承したおそらく外来の芝居人（実際、ユダヤ人やジプシーが多かった）のような身分の低い者を起源としてプロの語り手達の職業集団が形成されてきたという社会史的事実とあいまって、アラビアン・ナイトに対する評価を決定したのである。このような社会的評価は現代のテレビへの評価に通じるものがあるが、それ以上に、両者の社会的機能の類似性に気づく。語り手達の語る物語や即興の話が、娯楽としてのみ機能していたのではなく、過去の歴史を伝え、異国の風物を教え、不思議な出来事を解き明かすという、まさしく現在のテレビがになっている情報伝達の機能を持っていたのである。その意味で、テレビ等の近代的メディアが出現するにつれ、アラビアン・ナイトの語り手がいなくなり、語られることもなくなったのは、歴史の必然であると言える。とにかく、アラブ世界だけでなくトルコやイランの語り手に関する研究はもちろん、本来の口承文芸としての民話がどのように地域社会や家庭で語られてきたのかに関する研究が必要である。

VI. アラビアン・ナイトの「都市性」

第5章 Street Entertainments〔街の歓楽〕では、中世アラブ社会の民衆像を探るための社会史的資料としてアラビアン・ナイトを利用することを提言し、アラビアン・ナイトが語るバグダードやカイロの街の風景や、奇術師をはじめとする語り手の商売上のライバル達の姿を描く。ヨーロッパの社会史的研究と違い史料の制限もあり、アラブ・イスラム世界の社会史的研究は、ゲニザ文書を利用したゴイテインの一連の研究を除いてあまり進展していないのが実状である。アラビアン・ナイトは豊かな成果を約束してくれる社会史的資料なのであるが、著者も指摘しているように、アラビアン・ナイトは都市に生活する人びとが産み出した作品であり、たとえ王様の宮殿が語られても、それは一度も宮殿に足を踏み入れたことのない庶民の想像の産物であり、登場する農民や遊牧民も都市民の色眼鏡で見た姿を反映したものである。都市という空間こそが、語りの

場であり、語られる場でもある。司馬遼太郎氏は都会の文明的特性を「数奇」という言葉で表現したが、まさしくアラビアン・ナイトの登場人物の運命の数奇は、都会の数奇であり、日々が日常的平凡の連続である農村や遊牧社会のものではない。

VII. 泥棒とセックスと嘘と

第6章 Low Life〔庶民の生活〕では、犯罪者や犯罪組織などの裏の社会が、また第7章 Sexual Fictions〔性的作り話〕では、性生活や男女関係に関する庶民の姿が描写される。内容の紹介は紙数の都合上割愛するとして、中世アラブ社会に生きた庶民の犯罪観や女性観等の価値観を明らかにするための資料としてアラビアン・ナイトを利用することに全く異存はない。しかし、次の二つの事実を理解しておく必要がある。まず、アラビアン・ナイトの描く社会があくまで虚構であり、娯楽のためだけでなく社会教育として実際には起こり得ない理想像的な内容が語られる場合もあったという事実である。次に、アラビアン・ナイトがフェミニスト論者と反フェミニスト論者の両方にそれぞれの説の拠り所として引用されていることからわかるように、物語の内容は雑多であり、特定の方向性を持って扱われるほど一様ではないという事実である。また、男装や女装のように、必ずしも現実社会の反映ではなく、語りの文学的手法として使われている場合もあることにも留意すべきである。

VIII. 「科学」的パラダイム

第8章 The Universe of Marvels〔不思議の宇宙〕では、アラビアン・ナイトの中の不可思議な出来事や物体について、その文化的意味と聴衆心理との関係が説明される。西洋科学の洗練を受けた我々現代人の目には全くありえないことのように見える魔法使いの魔法や空飛ぶ絨毯のような秘密兵器、奇態な異国の住民と風習、ジニーのような妖怪や怪物、これら全てが、語りの場にいた当時の普通の人びとの知識や考え方を反映したものであり、まさしく彼らの「科学」的知識を背景に紡がれたものの語りなのである。占星術や土占い、人相学などの知識は、当時の最先端の「科学」として、世界の一見複雑で雑多な現象の背後にある原理を読み解くためのパラダイムであり、表層の事実とその技法を用いて、常人にはとうてい知りえない深層の秘密を「演繹」するための秘術であった。魔術師は言語の論理に内包された神秘と文字の魔力で様々な現象を操り、泥棒は土占いを宝探しに応用し、奴隷商人は商品たる奴隷の鑑定に人相学を用いた。

著者の指摘にもあるように、不思議の宇宙を描くアラビアン・ナイトの物語は、「科学」的虚構としての現代のSF小説に相当し、その起源と考えてもいいだろう。言葉自体の魔力による魔法使いに似て、ただ「語り」の技法の魔力を使うのだが、語り手は突

然聴衆を日常の向こうにある不思議の世界に連れ込み、その神秘をかいまみせ、そして再び聴衆の好奇心を満足させた後に日常に連れ戻す。その過程で、子供は空想の世界で想像力を養い、大人は日常を別の視点から見る。このような語りの心理的效果は、日常性との断絶によって精神を慰撫するという点で、宗教の持つ効果と似ている。ただし、アラビアン・ナイトが、その内容において「科学」小説的であり、その心理的效果において宗教的であるとしても、以下の点を十分認識しておく必要がある。つまり、語られる場面が過去指向であること、ユートピアの発想が少ないこと、さらには魔女などの扱いでイスラム教的世界観の影響が顕著であること、またさらには、登場人物の行動を予言したり規定する夢占いや運命に関する記述が同様にイスラム教的世界観の影響を受けているだけでなく、物語を進行させる上での経済性や心理的效果を得るための語りの技法として使われていることなどである。

IX. 物語の文法

第9章 Formal Readings〔形式的解読〕では、物語をその内容ではなく形式の面から分析するために、口承文学研究で展開されてきた議論を紹介し、それをアラビアン・ナイトに応用する際に生じる様々な問題点を論じる。アラビアン・ナイトにも世界の民話に共通する形式的特徴がみられるが、口承文芸でもあり文字文学でもあるという曖昧性或は両義性のために、アラビアン・ナイトは文学研究や民話研究のまじめな対象になることが少なかった。文学研究者は、東洋的エキゾチズムに満ちてはいるが文学的には粗野な作品と見なした。グリム兄弟を先駆者とする民話研究者も、特にドイツにおいては、民話は基本的に全て古代アーリア神話が崩れたものであるとするマックス・ミュラーの説の影響を受けて、物語の起源にのみ研究の関心を向けた。フィンランド学派の歴史地理的分析から、構造主義的分析で時代を画したウラジミール・プロップと、その後継者たるグレマスやプレモン、アラン・ダンダスの業績、またフロイト学派やユング学派の心理学的分析などへと至る研究史については割愛し、ここではそれぞれの学派のアラビアン・ナイト研究への貢献とその可能性について触れる。

アンティ・アアルネとスティス・トンプソンの『民話のタイプ』及び後者の『モティーフ・インデックス』は民話を分類・整理し、研究するための基本的文献であるが、これに準拠したアラブ民話の分類目録はもちろん、アラビアン・ナイトの物語群に関する分析もまだない。現在の民話タイプ・モティーフの分類には、口承文学を主な対象としていること、西洋の民話の枠組みであること、分類自体にも理論的欠陥があること等の幾つかの問題点があるが、アラブ民話の目録化は急務である。⁽²⁾ アラビアン・ナイトについては、ニキタ・エリセーエフのテーマ別分類があるが、これはクリステンセンの極め

て不十分な分類基準に基づくものであり、当該の物語や出来事などがどこにあったかを確認する作業には有用だが、物語の理解に役立つものではない。プロップの形態論的民話分析の方法をアラビアン・ナイトに適用したのは、アンドレ・ミケルの一連の研究である。しかし、アラビアン・ナイトの物語の構成が複雑であるために必ずしも満足のいく結果が得られているわけではない。プロップ理論を発展させ、民話の文法をめざしたトドロフの民話理論を基にさらに言語学の生成文法の考え方を援用したのが、エジプト人学者ガズールである。プロップ理論と口承詩研究で展開されたパリーとロードの口承定型理論に着目したのが、最近のデヴィッド・ピノルトの研究である。生成文法の名詞や動詞のように物語の構成要素を扱えるかどうか、また口承詩の単語や句と同じように最小の構成物語を扱えるかどうかは、議論の余地のあるところである。ミア・ゲルハルトの研究は特定の方法論によるものでもなく、形態論的分析を目指したものでもないが、物語形式の理解にとって示唆に富む。パトリス・クソネの一連の研究は個々の物語を時代的に位置付け、社会的・思想的背景を明らかにする極めて貴重な成果である。

民話をはじめとする口承文学の比較・対照による形式的研究は、理論偏重になったり、文化特有の部分を取り除いた物語の骨格のみを扱う無味乾燥なものになりがちだが、民話の物語に関する我々の素朴な疑問、例えば、物語はどこでどのようにしてなぜ産まれるのか、またよく似た物語があるのはなぜか、似たり受け継がれたりするのは物語の一部だけなのか全部なのかそれともモチーフなのか、どのような物語が人びとの記憶に残りやすく代々継承されていくのか、その生存競争の過程で物語はどのような変容を受けるのか、といった疑問に対する有効な手法である。例えば、枠物語の形式については、幾つかの相互に脈絡のない物語を一緒に繋げて話すための語りの技法として発達したと考えたり、次々に物語を入れ箱のように囲い込むことで聞き手に日常と非日常の境界が無くなり自身も物語の枠の中に入ってしまったかのような錯覚を起こさせる心理的効果があると考えたり、またこれを現代文学のように精神の不安定な流れを反映させる技法として高く評価したりした。しかし、民話の形式的特徴という観点から考えるならば、登場人物の性格描写が不可欠である近代小説とは異なり、民話では登場人物の性格がその行動によってのみ聞き手に語られるのであり、新たな人物が登場する度に自らの物語を語るのは、その登場人物の性格設定を行う目的に沿ったものであり、口承文学の形式的要請から発達したとも考えられる。

X. アラビアン・ナイト症候群から文明へ

第10章 Children of the Nights [ナイトの子供達] では、ヨーロッパ文学への影響を扱う。アラビアン・ナイトの西洋文学への影響を同じくオリエントの物語集たる聖書の

影響に例えているが、この例えは必ずしも誇張ではない。個々の作家や作品に関する議論は本書に譲るが、アラビアン・ナイトがその内容や形式において直接的・間接的に与えた影響は多岐にわたり、特に近代小説の成立過程で果たした役割は無視できない。もちろん、アラビアン・ナイト症候群とも呼べる文学的流行は、ガラン訳の出現という偶然や政治的関心による東洋趣味の興隆に伴うものだが、特にイギリスで顕著のように、古典文学の正統性への挑戦という意味でのゴシック的なものへの関心の傾斜と軌を一にしていること、啓蒙思想や科学的合理精神への反動としての不可思議で非「科学」的世界への憧憬的動機があること、現実のオリエントの文化への関心というよりはむしろ哲学的思弁のためのいわば日常性を超越した現実感の希薄な形而上的舞台としてオリエントが選択される場合もあることの以上三点をここでは指摘しておく。従って、古典的或は中世的なくびきから逃れて近代的自我を語るための文学的手法が確立され、また近代科学のパラダイムが暴力的に浸透し、また空想的オリエントが支配し開発すべきものとして現実の政治・経済的関心の対象となってくると、アラビアン・ナイトが子供向けの非科学的な異国の昔話と位置付けられるようになったのは歴史の必然と言える。語りの文化として中世のアラブ世界でアラビアン・ナイトが果たした役割や、近代小説が出現する上でアラビアン・ナイトがヨーロッパ文学で果たした役割は終わったのであり、今後学問的により優れたアラビアン・ナイトの原典訳が出現したとしても、18・19世紀のヨーロッパで見られたような文化的創造力をもはや期待することはできない。しかし、それでアラビアン・ナイトの影響力が全く失したわけでもなければ、その学問的研究が不用になったわけでもない。かつて詩人ワーズワースが子供の頃のアラビアン・ナイトとの出会いを詩作の糧とし、考古学者レヤードがホメロスを読んだシュリーマンの如く子供の頃聴いた黄銅城の話に魅せられて多くの考古学的発見をなしたように、アラジンやアリ・ババなどの個々の物語は、ただ、ディズニー映画『アラジン』を見ればわかるように、現実の中東アラブ世界とは無縁の普遍的テーマを扱う世界童話の一つとしてではあるが、世界中の子供達の心に何かを語り続けるだろう。

アラビアン・ナイトへの熱狂から醒めた現代こそが、そして近代的自我の確立のみに専心し、「語り手（ストーリーテラー）」を失ってしまった現代こそが、純粋に学問的関心からアラビアン・ナイト研究を行う最良の時期だろう。このようなアラビアン・ナイトの相対化作業にとって、前嶋・池田訳『アラビアン・ナイト』を得た現代日本の研究者は最も恵まれていると言えるが、原典自体の性格も含めて、同訳書を決定版として正典化するのではなく、20世紀の日本語版アラビアン・ナイトとして相対的にその学問的価値を判断しなければならない。著者も言う。アラビアン・ナイトの登場人物が物語ることによって自らの生命を救ったように、現実の世界においても、物語とその知恵が個人と

その属する社会を生き延びさせてきた。そして、現代人もその恩恵を受けた、物語の継承者なのである。

注

(1) 本研究は、文部省科学研究費補助金・一般研究C(平成5・6年度)「民話モチーフ・データベースの試作と物語構造の計量的分析手法の開発」(課題番号05801071:研究代表者・東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教授・小田淳一)の成果の一部である。また、本研究のための海外での資料調査は、平成6年度の国際交流基金の助成による。記して、感謝したい。

(2) 現在、筆者の属する研究所では、モチーフ・インデックスの改良を行うため、民話資料及び民話目録のデータベース化作業を精力的にしている[注(1)参照]。また、同研究所では、ロンドン大学 SOAS と共同で、中東民話の Oral Archive 設立を計画中である。尚、アラブ民話のモチーフ分類については、エジプトの Hasan El-Shamy による目録が近々出版予定である。

[本稿中の研究者とその研究書の具体的な名称については、紙数の都合上、アーウィンの同書を参照願いたい。今後の読者のために誤値等を指摘しておく。26頁11行:誤 Thomas Wright>正 William Wright, 33頁23行:誤 It>正 It is。また、欧米のこの種の一般向けの本においてはよくみられることだが、やはり読者の便宜を考えて、アラビア語の転写は長母音を記したほうが望ましい。]